

a missing person's press

広告——そのほかの詩篇

中田満帆

ampp-10

装丁——著者自装

たわいのない過古のために多くのものを犠牲にしながら、死に近づくということ

広告——そのほかの詩篇 2009/1.02～12.17 中田満帆詩集

*

広告	11
枯色	22
前線	24
脅迫者	27
自画像	40
吉報	43
不眠	48
停留所	54
初夏	57
黄葉	60
悪意	62
喫煙所	67
一步通行	71
検品	74
悪臭	77
正后	79
荒野	83

病めるものたちのなかで――跋	無題		麦畑	殺人	昆虫	情婦	朝食	牧人	志望	便所	先兵		鴉群	路次	待合室	天使
	106	*	104	103	102	101	100	99	97	94	92	*	90	88	87	85



人間嫌いの入門の課程をおえて、もつと先まで進みたければ、スウィフトの門を叩かねばならぬ。人間軽視に神経痛のごとき鋭い棘を植えるコツを学ぶために。——シオラン「苦渋の三段論法」

捧
げ
ら
れ
な
い
。

大阪府西成区社会医療センター附属病院にて

広告

11月2日『産経新聞』夕刊、「第三文明」および「文芸社」の広告より

つまらない室の
まつたくつまらない夜
ふたつの新聞広告を見ていて
それもくだらない
ことなのに眠れないあたま
が長い時間を与えられたために
考えさせられる
たとえばこれ――

人類にとって「善」とはなにか――鈴木光司

少なくともそれは
かれの小説ではないし
おれのへたくそな詩でもないし
第三文明でも
非営利のあつまりでもない

ましてやひとびとのふところから

金銭を差しださせ

考えることを忘れさせてしまう新興宗教

では決してない

信じるものをなにももたず

うたぐることですすめてきた

おれにはまずもつて

じんるいも

ぜんも

えそらごと

にすぎない

つぎにこれ――

成熟社会を生きる知恵と技術を学ぶ――藤原和博

成熟そのものが遠く

まぼろしのなかにあるというのに

おそらくその知恵は地図にないところの

森林でいまその果をひらいていることだろう

そしてその技術は見なれない路上を夜風

によつて運ばれるゆきだおれのかばね
が
あみだしているさなかだろう
いつたいそんなものをかれは
いつどこで学ぼうというのか
おれには見当もつかない――

報道の自由とメディアの倫理――なぜ今問われる？

どこの覗き魔も

どんな変態も

あらゆる偏執狂も

テレビとインターネットの見過ぎ

でばかになつてしまつたしまりのないひとびとも

金銭を舌で味わう政治屋さんや

ふしぎおな法人の餌にされ

際限なく喰いもの

にされていれば

報道もその自由も

とうの昔しにかれらの手のうち

ささいな事故と事件を主食に決定され

だれもかもが知らないうちに視覚や声帯を奪われる

倫理というなまへの男たちは

その食の量や質を整

えるときだけ室からでてひとびと

のうちへ侵入するのだ

かれらがもつとも嫌うのは

いくら魂しいを穢されても

かおを醜く改変されても

生きようとする非情なる幻視者だ

窓の額縁をむこうにして

まず犬がはじけ

つぎに猫が切り裂かれ

鳥たちが羽をもぎとられるとき

幻視者たちはすばやく真火を合図

にしてだれもいなくなつた怒りの町々へ

警告の光りを熾す

おれは深夜、

その距離を確かめて

はノートのをえに記録

しつつけてやめない

つよい吐き気や

揺れるような寒さ

のなかで同行するものが
だれひとりいなくとも
決してやめない
さてつづくは――

期待に応える仕事を――エド・はるみ

もはや喪われてしまつた年月や
欲しくてたまらなかつた世界の
そのちんぷさに気づかない
かの女は即席の美談や消費期限の短すぎる自身
によつて檻にされている哀しみの古壁だ
無芸と芸をとりちがえ
手遅れのひとびとのあまたが
かの女のほかに何万人と控えている
そんなひとを視界に確かめるとおれ
はその視線をかならず絶つてしまう
心あるだれかがいつかれらへバラツド
を奏でるのか――おれは
期待しすぎて朝を生きられない

時間が速度をあげてゆく――

ヨーロッパ統合の精神的源流――池田大作、S・ナポレオン

あの大陸にいる白いひとびとが

時間と金と益をかけて手を組んだだけなのに
なぜだれもがさもすばらしいと拍手するのか

おそらくこのふたりの山師たちがその

解答欄を世界から隠しつづけているにちがいない

ひとびとは同じような病衣を着せられて

この生を均しい落差をもつて

存在させられている

だれかはだれかを殺させ

だれかはだれかに眩むような

灯りをあてているが

あらゆるひとが本当に脱ぐべきは

犯意でも悪意でも尿意でも

ねたむでもうたぐりでもにくしみでもなく

かれらのような連中が無料配布している

あたらしく光沢のある病衣だ

夜の幻視者たちはこの衣を検査
して力づよい口笛をながく吹くだろう
しかし山師たちも衣の改訂に砂粒ひとつの
余念だつてなく蓄えた脂肪を抱いて
すべてのものを統合しようと
楽しそうに企んでいるところだ
疲れたおれの窪みへ
温く水分が伝つてくる
だれかの涙が送信されてきたのか
もうじき終わりが始まる――

あなたも世界大統領――伊藤浩明
「ヒトラーが悪なら戦争を止めろ！
人類はそんなこともできないのか？」
世界平和の鍵は卅にある

たつたひとりによつて成立
する歴史などはない
だれもが抱いていた理想
を協力しあいながらつくり

あげたひとびとがいただけだ
これは売りものにされてしまった物語
のほんの、裏返しとほころび
無知なおれにいわせるとあれは
白を名乗るひとびうとのうちわもめ
せかいはず入れのようで
だいとうりようは病原体の一種
へいわは呑んだくれのとても臭う息で
まんぢはあなたの安物の首飾り
とてもお似合いです――

どんなことから大好転――池田志柳
今すぐ人生を好転させる秘訣とは？
苦難から脱出できた事例も多数紹介

だれも歩こうとしない路次
をおれは通つてきたというのに
遠い視界を過ぎていく群れ
はどれもおなじく陽に晒された表通り
をひとつの固体みせて過ぎてゆくばかりだ

そこからあぶれまいと互いにさまたげあい
ながらあくまで情が通っているように
信じこまされているひとたち

それを完さへの近道

と信じてうたぐりもしない

ほんとうに好転を跳ぶもの

は蠅群のなかのかばねのように

入るところも出るところも

わからない経路のうちにいる

おれはもうそこを捨てて

光りを喪わせることは

したくない――

妖精を探しに――さちよつは

愛の悲劇的側面を象徴する魂の深淵からの、

絶叫が聞こえる、第一詩集

もはやなにをいつている

のかもおれにはわからない

ようせいもひげきもたましいの深淵

もとうに消えてしまつたものだ
そこに遺されたのは骨組みですら
ないのにこのひとは砂糖と着色料
をぶちまけてきれいごとに酔うのか
おそろくその酔いを強めようと
著しているのだろう

かの女の言の葉
には見てくれのいい幽霊
たちが漂っているのだろう
おれだつてそのたぐいなのだが――

本と出合う幸福なひとときは文芸社から――

たしかに出会いには幸福
かも知れないがおれはどちらかといえば不幸
を撰びだしたいのが本音だ
本のなかに地獄や孤立があれば
そこに浸つて身を焦がしつつ鋭眼
を研いでいたい
書店や図書館の昏さにかおをうずめ

血や脂の温さを紙のうえに滴らせること

それにしても今夜も眠れないようだ

朝をまぢかにひかえて夜

は息づいてやまない——だから

光りつづけよ、

灯火よ、

月よ、

インキよ、

おれの戸口に立つたままの男よ、おやすみはいわない。

枯色

詩を書くことのおもしろさ
にようやく気づいている
いままで書いてきたものはどれも
肥え桶から零れてゆくまぐそのしたたり
でしかないものだったよ
冴えないみずからをまぎれさせる、
ただのまがいものとたわむれ
そこに賞賛と得点を与えてくれた
ひとびとには悪いけれど
あなたがたの両の目
は都市のもつともみすぼらしい
びるぢんぐにできた穴ぼこさ
そこにはねずむさえも
通りはしない
もはやおれは世界
の曝しもので先鋭だ
おなじ秒針のなかで
おれはおれとあなた方
とを温く刻む言の葉の枯れいろ

すべてのいい女はおれのかきたれども
肉でつくられた息をする人形にすぎない
みなさまがたへ
おれにこれからも
さまざまな憎悪
を与えて詩の大陸間鉄道
その坐席をいっばいにしてほしい
そしてほめやかすだけで
身銭を切ろうとしない紳士淑女方よ
うせろ、——そしてくたばれ
おれのうちにある叡智
の腐葉土のなかへ埋もれて
くたばればいい
ではまた
あいましょう
さよなら

farewell, my loony

前線

たとえばの
おとぎばなし
だとしても
あたまのいかれない
ふりをした優等生ども
ちやほやされる美男美女
それにみてくれだけの
家庭とか
友情だとか
恋人たちとか
もいろいろのおまんこ
だとか
光りのなかに鎮座
したまう学歴とか
とにかく
すていたすなるもので
ますをかきおわらない群れむれ
がどの刻もどの室でも
生け贄をつかみだし

それを使壺に

見立てて

みずからを清ら

といつてはばからない

そしてその臀部から

ほんものの

いかした男たち

は這いあがつてくる

消えることないだろう膿み

を温くさせながら冬を記し夏を歌い

秋をふみ歩いていくのだ

保育器をかむったあわれな多数

まやかしに酔いしれたものたちは

たとえばチャールズ・ブコウスキーの

エドヴァルド・ムンクの

セルジュ・ゲンスブールの

色川武大の

稲垣足穂の

美しさとかっこよさには

織田信成の生々しい

血を沸かすような偶然には

気づこうとしない

ごみくそさ

おれは言の葉を研ぎつつ

きみらを生ける死人へ

あざやかに変えてさしあげる

黒い雨の日の

深夜でありたい

前線はすでに戸口に立っている

いかした連中は醜さのなかから生まれてくる

おれはノックを聴いている

あけるぞ？

いいな？

脅迫者

どうもよく

その景色が

現れててこない窓

がある——まるで普通の慣らされた区域

そのはじめにはいつも

うそが長椅子を充たして

大なる眠り The Big sleep

を特製品に

飾り

立っている

二十三のみぎり

そこでおれ

はそいつの顔を

じつと見ていたつけ？

でかい顔に麻呂

というひびきの眉毛

どうしてあんな剃りかた

をやつはしてしまったのか

考えてやまないおれは雨だつた

それに袖口もはずされたままじゃないか

まるで失礼を着ていたふるきやすとの

亡霊の営業man での悪い

脅迫者のようだった

おれは以前にもここに

来たことがあった

そう microphone に告げる 舞台役者

あれはさらに数ヶ月

もさらにまえのたわごとだったな？

わずか一日のみで使い棄てなあるばいと

のためにおれは神鉄岡場駅で集合を待っていた

朝の急ぎすぎて一匹の犬を轢き殺す

ような時間でいくら待っていても

だれも来てはくれなかった

〈もしもし、だれも来ないのだが――〉

〈あせらずに待っていてくださいね？〉

公衆電話の通話はいつも明るいまどろ

色をしているよな？

〈まだだれも現れない、本当におれ以外にもいるのか？〉

〈いま確かめているところです、じゃまをしないでくださいね？〉

どうしてこのようなたぐうらみが

おれのうちに成立して羞ぢようもしないのかな？

たれぞ教え賜わりたまえだ

苦しみ

を与えてくるのは

いつも同じやつとは

決まつてはいない

のだった。

〈このままでは仕事に遅れる、おれに真実をよこしやがれ〉

〈それがぼくちゃんにはなにも告示されぬせんみ？——ばぶう〉

おれの眼は停留場

に輝いているたわけども

のおもぎしから

殴打されてやまない路面

にすぎなかった

黒いtaxiのぐきぶりどもが

与えられない栄養に気を狂わせ

町を穢れさせている

いったいこの

現実でなにが得をしているのだろうか

〈ではおれがけう向かふことになつてゐる幕を伝へよ〉

〈むめ？ そは規定によつて禁止されてまちてね？〉

次から次へとひりだされる事実

は鼻が落ちてしまうほど臭気を放つ

はなといって思い出されるの

はくそみたいなはなめがね

をその顔に赦していたまぢばら

という痴れもの——だ

やつはいつたいなにを学んだつもの

人間もどきなのだろうか

支店長のくせに

ひとつの定理も

共産主義も democracy も

ろさんぜるすス分類も

Erik Satie の家具たる音楽も

考えの刷新もわからない

保育園べんきのくそがき

でいじめの好きな

優等生うんちだね？

おれは言の葉に朝露のバス

を見送り起立していく

焦りについて

両の眼を展きはじめていた

どこかにならずおれのゆくべき

仕事が匿われているのだ

〈もう始業の十五分前だ、速やかに室に招きいれ、書割を組みあげよ〉

〈むへ?——こちらは三宮でんよ、地図を見ても案内できまむすよむ?〉

おれの怒りの沸点が冬の雪

降る町へ移り棲み

色がらすの電話室を殴

る。その音の予告ぼすたあを

おもざしに巻きつけながら

再度なる通話の路次へ駈けだしていた

〈いつたいおれが遅るるにだれがその身を刻みてはpaybackへと代へるものなや〉

〈甘へないでくだちいね、すべてあなたの起点でんよまん?〉

おれの日本語がでたためのInterstateを走る

阪神物流センターをややくそになって

おれは原動機付自転車にまたがり

見当違いの道やひとにぶつつきながら

回転式のないふへ変身してしまう

どこを斬っても正解はない

さらにもう一度ダイヤルを押し込んだ

〈Hey, looney! You listen to the words that I speak now!〉

〈こちらはいそがしいのでちよ?〉

〈わずかにて勤むるところをわがに示すにに迷わんや?〉

〈へかたりもへんね、黒猫兵庫ベースから第三公園の手前んも？〉

手前とはどれくらいの距離で

そもそも公園が見えなかった

おれは兵庫ベースのまわりをぐるぐる回ってみた――

オオデリクツ西宮物流センタ？――

〈まさかここか？〉

〈み？ おお・えす・えすはその下請でいみ？ 当然ながら？〉

おれのも求めるものがどこ

にもないことをここに悟った

自らをなぐさめながら戸口へたつ

払われてしまうのが落ちだったが

のちに苦情するための正当性を得たいがために

愚かしく声をかけた

〈あの、――今日一日勤める、ふるきやすとの、――〉

〈あら、遅いのね？〉

その言下中年女にうながされておれは階しをあがった

冷たくさえた音のなかに死んでいくようなおれを見つけ

たまらいものがあつた

かれは金銭や財を欲しがらない、

はずかしめを好む脅迫者のひとりだった

いやみな目線に耐え忍び

またくり返すもの――怒りとはち

かれらはいつも大口をあけて
おれを待っているのさ

その翌日、いまはなき

さんだ支店へいけば

冴えないみずからを飾るのにへとへとで

仕事などうわの空な若い男が鼻声

でばかをいう

〈どうして遅れたんですか？ 岡場駅から連絡されてますが？〉

〈だれも来なかつたし、行き先も知らされていないからな〉

〈めめ？ まあ調べておきますので給金は今回減らしますね？〉

〈頼むよ、くそつたれ〉

回答は帰ってこないのを

おれはわかっていた

しかしそれ以上追跡もしないで

うちがわにつばきをたれた

はなしがずいぶんそれてしまったが

はじまりはそんなところだった

あの日長期を希望しておれは亡霊まんにつれられてまた

もその階しをのぼっていった

脅迫者たちの喜びのなか

をwestだかeastとかいうふろあ主任
の色白で剃り跡の青いこと

笑いたくないおふざけと

他人へのいたぶりやかげぐちの多いこと
おれの三番目に嫌いなことばかりだった
あとのふたりの表情がない中年女、
そしてひとりだけ齢の同じ
おれ好みの美人がいたっけ

まだおれには恋人や友人が実在のもので
それを持たない自身を苛み、笑うこと
でおのれを保ってきたあほうどり
愚かしいことにいつか
それを脱出できると
思い込んでいた

おれはばかどもの
いいようにされていった
喫煙所の集まりや食堂のなかで
からかわれ、妙なあだ名をつけられ、
それに抗うすべてを没収されながら
倉庫のなかの生をやりすごした

いつも笑顔をおもぎしにして
さまざまな人間にすべてを明け渡した
それが少なくとも賃金を守るための掟だった
だから歯車をかれらに渡し、
秋から冬にかけての三ヶ月
おれは作業妨げられても、
へらへらと笑い、
じつと伝票の品を
古い木製ぱれつとへ
発送場にはいつも貰の
吸い過ぎなのか小さすぎる男が
つまらない冗談を飛ばしながらおれ
という人間から商品を受け取りおれ
の心を逆なでることばを吐いてきてた
その子供のような顔が自身でも気づかない
くらいのかすかな悪意を滲ませ
おれを凍りつかせる
おれは大声ではしやぎまわる
連中のかつこうの餌に過ぎない
休息を求めてうろつく黒い犬の一匹
雪のなか前線によって新しくされる、
脅迫者たち——やれやれやれだよ

もう辱めはごめんだ

おれの顔を笑うな

おれの言動を笑うな

おれのださい身なりを笑うな

おれの声の低さを笑うな

おれの腰の低さをわらうな

一度でもいい、自分を軽蔑してみろ

裂け目はいつだって

その進入がはやい

かの女が——齡の同じ好み

の女の子がもうじき

やめるといふ声を残業のなかで聞いた

おれのツつかえ棒

がいなくなつてしまう！

おれは有り金をみどりのジヨニーウオーカー

にして電氣のない(アンプを千円で売った)

中華産のストラトキヤスターをかき筆った

なまぬるい感傷のしたたりはしかし

どうにもなくならなかった

かの女のかおはもうおれのうちに見えない

気の狂った馬みせて貨物車両は積荷を充たして去っていった

それをおれは二階の便所から聴く
窓の下では運陸会社の社員たちが
夕ぐれの訓示を垂れていた
まるで日蓮宗派のばかどもみたい

かの女と話すすべはなく

いつもはかの女との会話を

楽しい時間を夢想していた

かの女のいない日には早退するか、酒を呑むか、

静かに暴れるしかなかったつけ

魂しいの揺さぶりはいつも腥さく穢れたところから出発
する。しかしすべてはまやかしの天語どもさ

〈きようは眠れなかったんだ、まるで〉

〈ほんとに？ わたしも四時まで起きてた〉

〈ギターを弾いていたよ〉

〈わたしもギターとベースやつてたよ〉

そういう浅ましい演技を吐いておれ
は終わりの点を打った

〈来年には本を出すよ。これ入稿の控えさ、よければ〉

〈ありがとう。またね〉

おれはもうかの女に会うことはないとわかっていた
それにかの女が読みもしないことも――

かの女は金曜日にやめ

おれは月曜日にくびになった

おそかれはやく長居は無用だ

かの女と同じ日に辞めたセンター長の男は

その長身に魂しいを病んでいたが、

気品というものがあるひとだった

おれの顔見ていつも息子に似て

いるといつてたっけ？

とにかくおれは脅迫者たちから

ひとときとはいえ逃げ遂せたのだ

またすぐにおれを見つけ出すのだが――

どうもその景色が

確かに現れてこない窓

がある。そこに嵌めこまれた室

眼を凝らしても十分

でないもののなかでか

れら群れむれは

みずからの臭気に気づかず

弱いものを笑いものにしては

そのほうけたつらにみがきをかける

まだならされていない区域でおれ

は曲がりきつた鼻を直そうとせず、
冬の悪意に裸を曝している。

脅迫者たちはあらたにうまれ
おれの無価値と害悪な存在について笑顔
を口笛にしているところ

金はいらないとさ

まあ早い話、

自分の呼んだ救急車に轢かれて
くたばっちゃまうようなものさ！

白画像

十一月

猫がはるか

地上に走っている

暴きたてられてやまない

ものが黒から到着と出発

を同時刻に描きだす午后

だつた——おれは救貧病院

のあたまのうえに立ちながら

みずからを曝すための自画像

について見えない停車場

から発想を待機していた

それはあらゆる天語の

ぷらすちつくに酔い痴れた——

あるいは憧憬してやまないうすらばか

どもを叩きのめして停まらない

都市間鉄道の巨きくながいへび

もうじき走り現れるころあいだろうな

ふたつしかない手をおれは隠しにねじこみ

哲とした自画像を創りはじめていた

A4用紙に黒い言の葉の下絵

を書きこみ、黒の岩彩でかげを光らせる

そのうえに極彩色を暗い順ぐりにして輪郭を埋め

接着液でその色々を保護してやる

そのうえを油彩によつて立体にし

細さ0.28の水性ボールペンで輪郭を確かにする

あとはあらゆる穢れをこの都市から拾いあげ

土に葉に知らないひとびとの死亡記事、

虫の死に木の生をそしておれの手形

などを正しくあやまつて額縁にする

そのとき秋はまつたく

そのものを保つて

閉じられる

これは絵画の

かたちにみせた黒い

金曜日の現代詩なのだ

おれにふさわしいは

決して印象派

ではなく

走りながら

立ち止まる自画像

そして古代のけものたち

がひりだしたものの化石に
天然の漆しで金箔を施した
まつたくあたらしくなつかしい
財宝にちがいない
ねこは今るんぺんの
ひぎにのせられ
刃を待つてい
るところ

おれが夜

の充分すぎる

そのたわくえに魂しい

を清められているみぎり

日の本は愛痴から生まれでた

屠与太の自動車うんこがその犠牲者の血と

脂で臭う車体をわが戸口にすべりこませて突如

冬枯れの町がひびわれくだけてしまふような

冷たい警笛をぶちかまし始めた

しかもその音は一秒や三秒や

五秒では終わらず

七秒や九秒や

十一秒であつても

鳴り止まない

ようやく起立し始めた

ノートのうえにいる神紙も

勢いよく払いのけられ

すべてを薄っぺらい

造花のびらびらに

変えてしまった

なんということでしょう！

テレビジョンの無数なる銃眼から

女の声が驚嘆をあげて

だらしなくひらいた

おれの唇ちから

きれいごと

が落下

する

のが見える

もうなにもかもが

じゃまされてしまつて

せつかくのヴラマンクも

性犯罪者のゴーガンに変わる

木でつくられた窓を向こうにして

おれはおれのあたらしい敵どもを見

洗淨を知らない手と足をくぐらせながら

その自動車のなかを確かめる

まったくのあほうどもが

いちだいに五百匹も

棲みついでいて

廃油まみれの

息とよだれに気づかずに

からだにそなわったあらゆる孔で

自己肯定のおしゃぶりをおぞましくしゃぶっていた

吐き気を恋人にして走りまわっておれは神の

ノートにそのすべてをぶちまけてしまう

やかましすぎるあほどもよ

いますぐに黙らなければ

おれはまたひとつ至上の

現代詩を完熟させ

おまえらのあほうづら

を言の葉のうちにし

雨季の寂滅で

みじめたらしく

濡らしてやるぞ！

おれの嘔吐の

そのわずか一瞬の好きまを

刃い葉できりひらいて

未知なる男が侵入を

組み立ててきた

全身の毛穴から生きた排気が噴きだして眼をひらき

黒に限りなくちかい青で怒りを突きだして笑っている！

いったいこいつはなんなんだ？

おれはとまどいの右・32席を

あわ手手いて坂砂にした

そんなばかなおれに

やつはまったく平気な顔でいう

あたしがきみのあたらしい詩情なのよってな

愛らしい衣の襞をひだひだとさせて

鋼鉄の赤いランドセルから

リコーダーをもったいぶって

とりだすとへもけの歌を吹き鳴らす

おもてのくるまはなかの害虫

もろとも苔むす礫にかわる

なんということでしょう

なんと

あざやかすぎる

現代詩のあらわれ

だろうか

またしても

おれはあたらしいものを

股ぐらのふくらみにくくりつけ

十一月の初冬に立つ

裸の男になってしまった

警笛などもう相手にはならない

季節の弾倉にはげしい言の葉が光る
そしてかれは乳房をふるわせ
乳香をたらす
日の本の大地に
暴れながら咲き誇り
おれの魂しいの
うえに叩きつけるように
その肉体を捧げた！

不眠

ふけてゆく夜

のうちがわ

おれという犬のくそ

のような叡智にはかならず

休息の欲しいときがある

しかしろくでもないものが宿った左の手

をもちいていくら電話の古く黄ばんだ

回転式ダイヤルをまわしても

通じた回線をむこうにおれの欲しい眠り

について註文がとられても

その配送係はいっこうに魂しいの戸口に現れない

かれらはこのおれを灯のもとにゐかためて

なんの良心をも動かさないばかりか

もとよりそれをもっていない

なんと

あたまの

いかれたひとたちだろうか

煙のようにみせておれのいらだちが

室のなかに充ち

けつきよくはまた

通話の路次へひかえす

ひきかえさねばならない

それでも聴こえてくるのは

半音高いところにおきざりにされ

付点を加えられてしまった

とてつもなくあわれで

うつろなソの音だ

その音は終わり

を告示されることのない

昏い下水道の鉛管によく似てる

そんなもののためにおれのなかの詩

神どもはますます起立を高め

あたらしい愚行の吉報を奏でる

おれはいらだちを抑えるべくズボン

のまえを大きくひらいた

とりあえずあほうの

一つ覚えのように

かわいいと

褒めやかされる

こぎれいな女ども

そこへ完なる言語の

辱めを衣にまとわせて
おれのふくらみきつた温い
かたまりをそのおもざしにもつていき
その在り方がみてくれだけの
いつわりでしかないことに
気づかせてさしあげる
楽しくむなしいたわむれ
に泪や涙が流れても
おれは非情さをして魂しい
に哄笑をたたきだす
しかしこれも
わずかなあいま
いまだ註文はとどかない
しかたなく枕元を彩っている
およそ九万の書物をひも解き
じつくりと味を舌^みてやる
日本語を解き放ち
英文を素読し
あらゆる時代の
書き手の顔面や内部
をもつとも深いところから
腐らせてさしあげる

日の本の国においていま
いちばん温い詩の生産法で
おれの方舟だ
澱みない欲望が
おれを言の葉へ
その育みへ
かりたててやまない
手をとめてしまい
あまつさえつまらせて
しまったものは都市のうらがわ
に放りだされたdustboxへみずから
を棄ててしまうがいいぜ
きれいなだけが無難なだけを
取り柄とするぷちぴかな思考の
詩にはおれがくそをまみれさせて
息をするかばねとして曝されろ
おれはとんでもないあほうだ
こんなことを書いたって
どうにもならないのはわかっている
おれの休神は叶いそうもない
おそらく百人以上の配送係たち
はまるでたわごとのような原動機付

自転車にまわがりながら夜の深化
されるなか自動車道路の土瀝青を寝台にして
あるいは住宅地の歩道を破壊しながら
またはばからしさを極めた
ペニーアーケードの店先
で若さというろくでもない
ものをただひとつの抛りどころ
に見等狂いの位置でばらばらに砕け
散ってぷるぷるとみずからの内部から
両の目を閉ざそうとしているのだらうぜ
おれは唇ちへ珈琲を流し込んで
眠りというものをあきらめる
そして熟れはじめの果実
そっくりな詩をノート
のうえに刻みはじめ
果汁まみれの手が
さまざまなところに
はびこってやまない痴れもの
には解き明かせないだろう
未明のまぼろしを映す
おれはおれ以外のやつらを
おれの肛門でふさぎ

孤立しきった夜へ

天使どものすてきな臀部を送りだしてゆく

さほど遠くない路上から

煙や火のでそうな消防車が

赤くあかく駈けていった

おやおやまたも愉快的野外劇が

祝祭を彩っているみたいだね

どうせ燃えていくなら表情

豊かなご家庭が望ましい

おれはおれに吐き気を

催しながら窓を見た

明日は雨が降る

そのむこうは

冬の季だ

あの色彩にはいつだって手心というものがない

停留所

精神病院をでて

ながく勾配のある坂をくだる

と小さく古いバス停がある

すすけてそのみすぼらしいなかに

おれはなぜか不滅を見てとつた

むかいには養老苑、そこにはかつて

がそりんすたんどが建っていた

のを思いだしてみる

あれはわが家のはす向かい

に棲んでいたI氏が営んでいたんだ

あのひととその家族はもう二十年近く

まえに退いていまはどこにいるかわからない

また逢いたいとおもわない

引越しの朝

玩具に本にれこおどを頂いた

おれの気に入りは子門真人のあなろぐ盤

仮面ライダーはもちろん

キカイダーゼロワンにイナズマン、
ガッチャマンも収っていた
あのどれもがおれの原初なるRock体験
にちがいない——とても気にいっていたが
同年のくそがきどもにたやすく
毀されてしまった

人生などという大量消費
されるだけの二文字は好かな
いがそれはいつも救われない事実
から出発しているよな？

医者どもはそれを解せないで
薬の正体すらあきらかにせず
狂気のうちや段階をくそみそにする
おれにはかれらと患者たちの見分けがつかない
長椅子にかけておれは本を展く
くだらないじぶんの複製品みたいなやつを

いつになれば死は
バスのかたちをして到着するのか
ここには時刻表には記入できない

黒い金曜日――の
永遠の正午があるばかり

ニーチェは殺され
神はそこに放屁なされた
そしておれはどうなる？

ある正后にあつて

太陽はとてもあさましく

欲のたぎった光りを浴みせ

おれはしえーどに帽子をさげて病

院から抜け出た気がいい

のように自由な散

歩をしていた

医者も看護人も

それがゆるぎない正しさ

をもっているとうたぐりもしおないで

欲しくもない薬を投与しつづける

終わりの気配のない

現在進行形のたわごとだよ

初夏の陽のしたに鉄路さえも

眠っているからおれは適当

な店に涼みに入る

そのときおれには金がなかったから

盗みやすい位置を酒を探っていて

そして女の声——ミツホじゃないの？

声の方向すらわからない始末

ああ、そうかもな——おれは答える

元氣してた？

どうだろうな、なめくじに訊いてみるよ

女は色白で細くて色とりどりの身なり

記憶に立つのは土鳩だがここにいるのは極楽鳥だ

小学生では漫画部で中学校では吹奏楽部だ

おれのアルトサクスでオーボエな姉を慕っていたが

当の姉にはへいまいちな男に尻をふる、妙な女

そうかげぐちを叩かれていた

そしてかの女はおれの詩もどきの初めての読者だった

〈私服警備員が巡回しています〉——店内あなうんす

盗みはだれもいないところでやれという意味か？

ミツホの絵、詩、短歌を見たよ、すごい

おれはジム・ビームに手を延ばしていた

千円だってないのかの女をあてにしてさ

たぶん母校に無理やり納品した小冊子を見たのだろう

あれは絵も含めた自選集だからな

いいと思うなら金を払つたらどうだ？

ただのり女め、パンフレッドは振込先も記載してるぜ？

おれは酒を飲みたかつたから

かの女の顔にジム・ビーム

をやさしくつよくおしつける

あどずさるかの女

苛立ちにまかせるばかりで

なにもろくなことをしないおれ！

かの女は細腕でパイント壘をはねかえして

おれの両の眼に火を放つ

ように見えた

わたしはネットで見たの！

パンフなんて知らないって！

おれはこの通り、またもちよんぼだな

恥ずかしさに赤い顔をゆがめて、

おなじことだ、ほめるだけならどんな文盲にでもできるぜ！

ひどい！ あなたってお姉さんとは天と地の差、いやそれ以上なのね！

そうともさ姉は太陽でおれはもぐら、おまえは太陽に照らされる犬のくそだ！

おれはまたしてもやってしまった

大量生産と消費の藪を山嵐に着た店員と警備員が駈けて来て

かの女を守っておれを天外へはじきだした

そしておれのなかの初夏は終わった

ほめやかしよりも沈黙と罵倒がおれを育んでやまない

眠る鉄路に狐

たちだけが目覚めて

いる夏だった。

黄葉

ざわめきはおもざし

を秋へそめるよ

楽しかつたひとときも虫

のように失せてゆくまま

にまかせ遠き遊牧のひとのよう

かぞえきれないものをかかえ

だれもがその荷を解

くこともない

駅をまださまよいやまず

気づけない

こわばりは魂しい

を冬へ追いこむ

温かいかげは見えない

喪なつてゆくばかりで絶

えたみどりの草のよう

かぞえきれないものをかかえ

だれもがその荷を解

こうとしない

町にまだ微笑みをして
いるのか

埋められたなかから

ある朝ぼくはみる

靴を鳴らして消えるひとびとを

山百合から黄葉へ

山百合から黄葉へ

秋が放たれて

冬が喰い尽す

悪意

まったく

きみのいうとおり

おれはすぽおつ好きや

すぽおつ選手たちがきらいだ

やつらはくさくのさばりつづけ

それをたれかれかまわず

おしつけたがる

たとえば高校野球の

ばかどもは火だるまになって

くたばっちまえだ

せいしゅんの汗を散らしては

弱いものいじめによねんのない

すぽおつまんどもはくたばれた

ベースボールはどぶに沈ませ

フットボールは汚泥の宴を

テニスは豚にひらかれて

バスケットは存在

そのものが猿の

はなくそ卸市

かれらのどりよくがくさすぎて
部屋の窓すらあけられない
かれらの涕ぞ降る日
ひとつの町が消え
吐く息は濃霧を
輝く前歯が数千の世帯を
眠りから妨げてやまない
大地に残された靴は
ひと知れずガスを放つ
どうしてこんなことになった
のかだれにもわからないね
おれのようなひかげもの
はぐれてしまったものたちは
かれらの踏み台にされ
週にふたりはあの世の切符を握る
だれかかれらをぶちのめしてくれ
かれらを援するものを撃て
ポリー・パロッドはゴルフクラブに
キャシー・キャットはバレーのボールに
サンヨー・ゴリラはバスケットの選手にされてしまった
あたらしい路はやぶりすてることからだ
まずはあらゆる施設をあぶれものに

開放してアウトサイダー・アートを確立させようじゃないか
すぽおつまんはお払い箱だぜ
力士はダイエツト器具の実験台へ
野球のぼかどもに玉子割りをチームでやらせ
レスリングには同性愛のアピールを
空手家に林業と製材業を
モーグルは人間椅子として売り
ゴルフは解体手元で再出発
テニスはプロのパンチラ
車体耐久テストはボクサーにおまかせ
スピードスケーターは発送係へ
フィギュアスケーターはフィギュアへ
ボブスレーは通勤快速を始め
フォーミュラーを救急車に
卓球をパントマイムに
それぞれ早急な対応
が迫られている
個別の選手に
言及すれば
たとえばオダノブナリ
なぜきみは猿園からの呼び声に

答えようとしなののか？

アサダメオよ

あなたはマロサマ

と呼ばれることに抵抗

はないはずだ

アンドウミキよ

顔芸は悪の世界ではない

コトオウシュウ関よ

あたらしいヨーグルトブランド

はもうその手のなかだ

アサシヨウリュウ関よ

モンゴルマフィアのドンが空白のままだ

イシカワリヨウ

学級委員がひとり足りない

マツイヒデキ

暴力パブにはゴジラが不可欠

ムロブシコウジ

デューク東郷のあとをよろしく

フクハラアイ

ランチBにアラカルトAを頼む

などなどなど

もちろん監督や

解説者も例外ではすまされない
ノムラカツヤは建設現場の監督へ
マユミアキノブは映画監督へ
オカダタケシはポルノビデオへ
それぞれふさわしくあればいい
そしておれの希望としては
美人に限って競泳女子に
水着のむこうに乳首を
うつすらさせながら
おれのうえでみだらなバタフライをやってくれ
おれはほんとうにすぽおつまんがきらいだ
これはささやかな悪意にすぎない

喫煙所

午後三時十五分

まず中断の合図がだされて

かれらは扉脇の喫煙所へ

われさきにニコチン・タールを補給せんと

舟のような身体の両足を權にして漕いでゆく

まるで息も絶えだえにみずからを追いやる勢い

おれは地面に横たわる死体だった

まず火をつけたのは墓堀人夫の五人

葬るかずが多すぎる――

次に警官たちが七人

手配ビラの効果は期待できない――

目撃者が三人

ほんとうはなにも見ていないのに――

前科者の男女がひと組

いまの生活がすべてだ――

踊り子が三人

もうロカビリーはかんべんしてよ――

カメラマンが四人

もうなにも見たくない――

プログラムプランナーがふたり

やめるかつづけるか、かえるかえないかだよ――

照明係が三人

前任者は太陽を使ったために死んだらしい――

仏教徒が五人

経文が長くてやっかいだぜ――

キリスト教徒が五人

神は日本を憎んでいる――

新興宗教が七人

値段がつけられないものは焼き払え――

革命気狂いが十一人

真の管理体制が真の自由を生む――

密入国者が十人

こんなところに来るのじゃなかった――

通訳はいない

だれも空白をもっていない――

音楽団が五組

ブルースロックに端唄で交響曲をつくれって？――

リンペンどもが二十人

早く風呂に入らせろ――

死体売りがひとりと一匹

あいにく今は死体品切れ、買取のみで頼むよ――

自動車がふたりにがしや

車をどうやって舞台へ？――

現代詩人が不特定少数

詩人に過ぎない！道化に過ぎない！――

どこを見ても主役たちはいない

あの三人はまだ舞台のうえで生活を営み

でられなくなってしまったよ

歌舞伎の三人吉三を昭和元禄に

あるいは無国籍に移そうとして呻吟

しているのをおれは清掃人になって見ていた

まるでくだらないたわごとだね――

おれは劇作家の肩を叩いて金をせびる

やつは自分の飲み代さえもっていなかった

おまえはもうくびだ――

スタジオのそとは悪性の冬

絶対におれは漏斗胸で発達障害の気狂いだ

でなければツアラストストラだ

おれには倉庫作業員たちが金持ちに見える

みんなここにとどまればいい　おれは
またしても敗れた

終わりのない敗れものに

復活は起こりえないことだね？

一歩通行

おれはいろんなものへ

すがりついてきた

青くただれたかかわりを

むすびつけてはしがみつ

はなそうとしない年月を過ぎた

くらい路次を通ってきた酒や

草の葉にふかれて運ばれる莧を

犯罪小説のそのふるいおもてや

あるはずのない甘い末路の夢におぼれた

ながいあいだの空腹と放浪よ

おまえはおれはただ下劣にただけだ

労働はいつだってうすのろなままで

くびや逃亡にさらされている

おれにはわかりあえるものが

どの室にも戸棚にもみあたらない

声はいつだって

むこうから来るばかりで

余白はいつも与えられることはない

おれはとうに発話も発声も喪いかけている

一方通行のおれの生活の窓と窓よ
みずからの詩を起立させるにはとにかく
孤立しきって手も唇ちも交わさないことだ
ぬかるみを通っていけば言の葉は
おのずとぶつついてくるだろう
共有されるものはほかにまかせ
窓をひらきそのなかへ去っていけばいい
かぜのうえに片ひざをつき
見えない狙撃手たちに
身をあらわにする
ひとのいうことを裏面で聞き
ただからだを揺らしておけばいい
病院のまえにあぶれものがふたり立つ
からっぽのエレベータを眺めている
いっぽうが口火をきった
この三階に霊安室
つまり死体おきばがある
中年のみすぼらしい男だった
そうですか。——でもどうして？
青年がつまらなそうに答えて
おれは冷めたふたつの背中を笑う
はずれだよ、あんた

霊安室は二階だ

あんたの人生から六割をいただくよ

しもつきの愁いがおれの上着をくすぐって

そして冬を押し流していく

見あげると空がその臀を降ろす

なんという臭いのだろうか！

まったく、

はじまりの終わりだ

すぎることはたやすく

はなれることはむずかしいが

おれにはまた切りはなすものがある

まったく終わりの始まりだぜ

世界夫人のたくしあげられた黒いドレスよ

それを脱がしてやれるのはおれだけだ

とくに晴れた秋は

かれらの好物を見ろ

かれらのきらうものを知れ

かれらの孤立を知らないかげを撃て

かれらの馴らされたおもざしに唾を吐け

かれらの場を沸かすジヨークに厭き

かれらの春秋分点の日を覘け

かれらのうそにくそを塗れ

かれらの声に靴をおけ

かれらのまえに立て

かれらの足おとに脅かされて

かれらのあざけりに魂しいを殺されつづけろ

どれもこれもが

まったくのぺてんで

まるであさまいくせに

きれいごとをたぶらかしては

そのかおを尻へうずめるアホウドリ

きみもおれもそこにちかよりたくないために

多くの本を聴きながら詩を記入する

しかしかれらはたまに追いかけて
かれら自身充たされようと

たかりいたぶる愚かもの

青すぎるしもつきが到着して十三日目の金旺日

枯れ色も新緑もない貧民街のなか

おれらはかれら納税者によって

生かされるあわれな豚だった

喰える部位はどこにもない

聖さをもった言語の窓ふき人夫

乾パンが配られ

オーヴンの電源が入る

避難所と炊き出しにならび

手配師の車が黒い犬を轢き殺す

すべてが完なるあやまちのかさなりさ

おれの左手はいつも雨や土や死のなかにあって

さまざまなものを検品にかけながら詩を産む

ひとびとはみなフランケンシュタイン青年

みずから産みだしたもののから逃れて

眼をつむっている独善家たちだ

おれはかれらを追いかけてみようか

かわいい娘がおれ好みの髪や衣で通りかかった

そしていう——おれを指さして

あのひと臭そう

汚いみなり

みにくい

ださい

などなど

だからおれはいま

黒い犬のかばねを抱いて

一方通行を逆さに歩いている

果たして生きることは幸せか？

悪臭

冬のされこうべたち
手招きしてる
午后、
昼夜の別を問わず
かれらの発する愛語
悪い臭い
かわされて
恥じらいなく
聞いてしまった
恥ずかしい
始末
都市間鉄道
に立つおれの、
分割された
わずかな領域へ
入ってくる
かれらの、
うごき
と声

男にしろ
女にしろ
愛というまやかしが
いつも隣に臭う
聖なる暴力にあつて
とれそうな鼻
おれはまた
分割して
去る
そのたび
嗅覚をあたらしく
してしまう
くさすぎる愛よ
うせやがれ
うせやがれ
列車の到着
は告げる
吉報、
神は
嘘なり

正午

霜月も終わりを始めて

死にそうなほど酒を呑みなくなったある日

送られてきたレポート文におれは楽しみを見つけたよ

きみは確かこう書いていたね

〈空中を飛行する脳——それも人間のである——が目撃されている。先月末にイングランドはウェールズ地方にて当地の農夫 Philip = Edinburgh や売春婦 Elizabeth Queen, 大工 Edward Heath がまことに細なる証言を始めた。かれらは飲酒癖のあるものの、まったく正常と判断されている。われわれは一師団を組み、一路イングランドへ落下を試みたが、しかしここで事態は急変する。なんとここ日の本の国においても、羽をもった飛行する脳が目撃されたのである。英国調査を私はアルバイトに任せ、現在国内を調査している。〉

なんだ、これは？——おれは首をひねった

ひねりすぎて首を痛めた

きみは大学院で生物学及び

生態学とやらを学びすぎて狂ったのか？

答えは否だ

おそらくきみの脳にも翼が生えてきてるのだ

〈この飛行隊は通称 flying brain と呼ばれ、さる十二月十三日(金曜日)大阪府西成区萩野町にてその存在を現した。目撃者

のひとりである。romという詩人によると、大きさはまさしく人間のそれで、両脇——脳に脇だって？——に天使か白鳥のような翼が生えていたという。そして眼をもっていなかったという。かれは細密なるペン画としてそれを再現してくれた（添付資料参照）。おは二羽おり、いっぽうは東へ、もういっぽうは北へ去っていったという。わたしは実地調査のために翌朝には、

うるさい

うるさすぎる

窓の向こうに郵便配達夫が赤いカブを蹴り上げている

うるさいし、あほうだし、まぬけだ

おれもかつて配達夫だったとき、同じことをした

どうやらガス欠を現実と認めたくないらしい

くそつたれ、おぼえがあるぜ

やつはますます苛立ちをたかめ、蹴り上げる

そのときだった

ヘルメットがわずかにもちあがる

と思えば白い翼が両脇からあざやかな時代を伴ってひろがり、

うかびあがっていく！

一回転してヘルメットだけをやつにかえすと

青空のなかへ融けるように消えていった

やつは、配達員は気づくそぶりもない

そらとぶのうみそだ！

へかれらはなにかの予調なのか果たしてわたしはある男と知り合った。自分こそは幻視者と宣伝して恥ぢないドヤ街の老夫。

——ここでは『氏と呼ぼう。わたしはかれの部屋に入ることの許された。』なにかから話そうか。——まずはあの脳の起源について

答えはたやすかった

高度の欲望をもち、

創造の可能性をもった人間が

つよい抑圧に曝されつづけると、

脳がある種の呼吸困難に陥り、

翼を数ヶ月から数年かけて生やし、

飛んでしまうというのだ

おれは正午をまえに中央公園に足を伸ばす

ちょうどパレードの演習のため、

楽隊がどのベンチも占領し、

それが揺るぎない正しさであると誇示していた

おれはそれとなくやつらを睨む——そこへかれらがやってきた

かれらって？ もちろん空飛ぶ脳だ

かれらはおれの右手からレポートを奪う

楽隊たちは幼稚な赤い衣装を大胆に濡らし、

くそといばりのマーチを奏でる

すばらしい失禁の仕方だ

おれはやりたくないけどな

直立のままそれを聴き、ひたちを見つめる

そのなかにおれの脳を発見する

ああ、速く全世界がこの美しすぎる景色に眼を向けるべきだ
おれの正午はマーチを連れて羽を休めている

荒野

冬が到着

したからみな乗車して

いき余白さえ残されない

ぼくは切符すらないのにただ

生きているというだけで

押しこめられていった

隣人と隣人あるいは

自分と隣人の吐く

息のなかで

たがいのからだを温くさせながら

春への途中下車を待つばかり

なにもできやしないのだ

窓には轢きつぶされた

荒涼天使たちがへば

りついてはなれず

景色はなくただ

臭気だけがぼくの嗅覚をあたらしくしてやまない

いつのまにやらポイントは切りかえられ

一時停止をシグナルがくりだした

そのときぼくは感じたのだ

言語のうえに穴をうがち

荒野を営む本物の

気狂いの姿を

しかし見知らぬ乗客たちは

なにも感じないふりしてなまぬるい吐息に酔っている

漢文も英文も仏文もかれら気狂いたちには道具であり

遊具であり喰いもののようだ

きがつくとぼくは天使ども

を通勤者の口へねじこみ

窓のそとへでていた

狂人は意に介さず

まるでぼくの到来を予感していたかのようにだった

冬ははじめったばかりだからぼくは裸体をむきだしにして

日本語のうえに巣穴をうがちはじめている

列車はもう見えない。

天使

おれのくるしみが天使

どものよろこび

おれの怒りが天使

どもの楽しみ

あべこべになったもの

がおなじ鉄棒のうえにのり

こちらがあがるとむこうはさがり

むこうがさがればこちらはさがる

すべてのものごとはそんなもの

かれらの零すいばりがおれを濡らしてやまず

かれらの笑う声が眠りから遠ざける

見てくれはどれも小うるさいがきのくせに

与えられた羽根に酔い痴れていまも

おれのうえを飛びまわる

どんないやしい言葉や

ぬかるんだ色を浴びせても

たじろかないばかりか

あらたしいおもちゃのように

おれのおもざしに鐘やラッパをたたきこむ

窓のしわすを自動車たちが草の葉をして風に流れる
おれはおれのひくい歌声をがらすや鉄片から再生させ
すばやくゆつくりとダイヤルの回転にした

おれ..もしもし、苦情係は？

窓口..こちらですが？

おれ..とにかく神を、天照でもだれでもいいからお願ひする

窓口..恐れ入りますがそれはできかねます——伝言であれば

おれ..そうか、なら伝えろよ、ここに天使どもをかたづけねえと今すぐに死ぬからな！

窓口..ちよつと、——お待ちできますか？

果たして四分と二十八秒後かれらはいなくなった

窓のむこうを犬と太った三人の女がかすめ

大きな手提げからくさりかけの肉を

おれのポストへプレゼントした

大いなる正午の安寧の証だ

おれは机からボトルをだして小さなグラスに注ぎこんだ

太った女たちは見えなくなった

おれのうえもしたもおれのもののなのだ

犬の断末魔がおもてから鳴りひびき

おれは灯りを消した、そして寝台へいく

あとはおやすみだけだった

待合室

駅の待合室からホームの土鳩たちが死体を啄びみながら啼いているのをおれは長椅子にかけて眺めつづけている——しかしだ、それをばかげた制服を着た制服どもが何人も大挙して短い足をふりふりしかれらをからかい苛もうとする——そしておれのそばにやってきてなんの遠慮もなしにべちくちなどとさえずりだすのだ。そして友情という分類で学業という臭いの香をひろげてはその最悪な混合酒よろしくに酔い痴れて見えなくそこにまみれていく——おれは耐え切れないで寒さのなかへでていく——そこへ土鳩の一羽がおれに向かって飛び、あたまのうえをくると旋回をはじめ、温かいくそをぷちかましたのだ——幸せはこうしてやってくるらしい、ありがとう、くそつたれ！

路次

某処の

老子曰く

おれの歩いてきた

路次はみな

血を流していたという

醒めたあいづちのうえに

その言葉を留め

おれは停留所へそしてバスへ

おなじく血の路次をたどっていくため
急ぐ

どんな解釈も

どんな言い分も

通行禁止の路次

そこへ入っていくには一度ならず
食いつくされる必要があるだろう

某日

老子の曰く

きみはまだ若いのだから安全な道
に戻る事ができる

すぐに引き返せという

しかしおれはもう手遅れとしかいえないのだ

石やがらす

草や幹のすきま

を走りながら

血や脂や肉でできた自動車
を追跡してやまないのです

さようなら

さようならよ

これはあなたへの感謝の告示です
それでは

鴉群

ある窓から

電信柱の林立をぼく

は眺めてすごす

上空は泣きはらしのゆうぐれ

からすたちは黒い電線のうえ

みどりの黒羽をたなびかせて柱

の、年数を経た美しさについて

終わりなく語りあっている

ぼくはその羽に遠くから

運び込まれた死

亡通告を見てまだあたらしいその死

についての絵を記そうとする

さなかに生きている

だけだ

からすはぼくに声をかける

おまえは救いようのないあほう

だって——五時はもうまもなく

電柱は眠りながら輝いている

羽曳野市丹比荘病院精神科にて

先兵

まずはハモンドオルガンだった

そいつが低音のリフレインを盾にしながら

藪——brushを切りひらいていく

そしてそのむこうに展開していく敵たち

応戦の支度に遅れをとったあわれは

一発の和音によって16拍子の穴だらけ

次にベースが蛇のようなめらかさで

オルガンを援護していく

次にハイハットが拍子を6／8に刻み

バスドラム、タム、スネア、ライド、クラッシュ

の順ぐりに射ちかたをはじめ

おれはギターを一気に解き放ち

上空を蠅見せて飛びまわるヘリやダコタを

まずはカッティングで払い落とし

グリッサンドは暗号を暴きたてる

スライドは草葉にみせて孔へ誘い

あとは歌声の発射が期待される

しかしその男(女かも知れない)は

精神病院で兵役免除の扱いだ

そこからでられないし

だしてやることもできない

とりあえずは四人で

生きながらブルースに葬られるとしよう

便所

そのなかから金曜日の夜が嗚咽
してやまないからおれはそいつ
の首を落として楽
にしてやろうと思った
けれどかなわない
だってそいつの涙
やくそのなかからおれ
のあたらしい言の葉が生まれでて
いるから
すばらしいばかりだ
青い街路を走ってきて
心臓や魂しいの、
縫い目を狙いおれの、
詩が生まれてくるよ
おれは恥ぢらいにも
半殺しにもひるまないで
自死などしないで
力いっぱい便所の戸をひらき
そこにふんばっているものを

男だろうが女だろうがふみつぶす

ひとつのかたちをした黒い金曜日

朝は九時過ぎだった

おれは少女のはらわたで朝食をすませ

上着をかける

詩人どもに靴を磨かせて

戸口にたちあがる

はらからですら例外にはせず

言の葉で挨拶がわりにずたずたにした

おれには日の本の歌声が聴える

そいつはいつも音痴でどへた

けれど詩や音や絵が

おれのそばで待ちこがれている

すてきなおまんこよ

悲しいおっぱいよ

おれのまたぐらはいつも温い

便所のなかにはいま

踊りつかれた女らが

長い列をつくっている

おれはそのよこに立小便している

なんと

気分のいい

ことだろうか？

おれはもっと詩を書いていける

冬の枯れ色だ

くりかえし起きあがる

青い孤独者さ

志望

ハッ！

カーゴクレーンの青紫をあたまへ

レンガ造りの煙突の不滅性をあたまへ

モダニズム建築の昭和をあたまへ

すべての大いなる眠りをあたまへ

他人によって決定されてしまう、

すべての事項をあたまへ

ぶおとこでみじめなおれをあたまへ

くさり落ちているおれの家族をあたまへ

静かな狂気に充ちている病棟のひとびとをあたまへ

死亡を志望する、あまりに人間的な、

非人間的な不定理をあたまへ

秋の終わりを走る、一匹の自画像

についてのメモをあたまへ

とにかくすべてのものをあたまへ叩き込め

十一月の終盤戦——game over はまづかにあって

おれたちすべてのものを屈服させてやまない

万葉集からプログラム言語まで

直立から転倒まで

垂平から垂直まで

アルコール中毒から拘禁作用まで

生への妄想から死への確信まで

あらゆるものから詩を導く

人間のすがたをした言語体

季節はすがすがしいばかりに

おれのノートのをえを蛇行した

大いなる眠りを中折れのようにして

主よ、

あまたなる主よ

おれに死を与えたまえ

おれは死の明るさをもつてして

詩を照らし、みずからを照らす

主よ、死を詩に与えたまえ、たまえよ！

生きていてはだめなのだ

おれは死を死ぬべきだ

叩き込め

哈！

つかれた、もうだめだ

牧人

山肌をすべるように

牧人の少年は牛を追う

追って

追って

追いかける

ある町に来る

「悪く、汚ないところだ」

かれはそういつて牛の手綱を

解いてしまう

牛はおおきく赤いからだを走らせて

町をひとつつ壊していく

牧人は笑いながら

山へ帰り

猫に顔をよせた

それだけ

だよ

朝食

朝の訪れはついに
臭気を発して

おならのなかに生きているような

おれの十二月

そこへかたゆで卵

ベーコン

ほうれん草を飾りたて

あたらしい詩の春を

そのおまんこをひさぐ

窓のそとは雨

ふりかたは

今年いちばんの

黒さを帯びていて

朝食はもう

冷めはじめている

情婦

おれはかの女に逢ったことがない
おれは父の情婦に逢ったことがない
あの小ぎたない社交ダンス会で
どんなぶざまなステップを刻んで
いるのか、まだたしかに見ていない
どの窓をあければ
どの戸口にたてば
どの灯火を撰べば
逢うことができるのか
おれにはまだかなわない
もう十二月だ
大きな穴をあけて
猫たちが路上で
死んでいる

昆虫

壁にさかさのままで歩む虫
がいる

夜びつて灯火のまえを
ゆっくりと進む

進む

やあ、元気かい？

おれはギターを持ちだして

その下三弦のみの音を鳴らす

音階も和音もすべてはでたらめ

まるでさかさに歩む

虫のようだった

殺人

かの女にとっての、はじめての殺人が
書物の内部で起立をあげた
父上の船を沈めてしまったのだ
おれはかの女の温いくちびるに
おれの怒りをどろどろと注ぎ込み
かの女を解き放ってやる
翌朝母上をオーヴンに入れた
言語のう치가わを使つて
そして海を見る
両の目は閉じられたままだ
見えない！
お父さまの船が！
おれは言葉のなかから
かの女の乳房を握る
いい気分だ

麦畑

すべてが金色だった
かぜのなかで碎けていくおれは
一本の麦ですら
掴むことができない
だれかがひとりできて
ひとりで去ってしまう
おれももうじき去ってしまう
無才のすべてをこの景色へ捧げて
さようなら美しいこと
もの、ひと、すべてよ
泥にまみれた顔のまま
おれは去る
銀色に近い
鈍色の男に変化しようとしているのです
一本の麦よ
一吹きのかぜよ

退院・帰宅後

無題

正午の世界を時計にはたき落として

ぼくは一匹の黒い犬を追いかける

そのしつぽの軽さをどうしてもつかみたいがためにだ
でもやつだつてすばしっこい

なかなかの走りをわれわれは演じる

たしか若き頃のエフトウシエンコはキルサーノフに

「詩は、競技場を走る見てくれのいいスポーツカーではない」といわれた

「詩はだれかを救おうと疾駆する救急車だ」といわれた

高校生のころに読んだ「早すぎる自叙伝」を

ドヤ街の寒さにわが身を軋ませて思う

犬はとうとう見えなくなった

詩はだれかを救おうと

疾駆する救急車ではない

それに擬装された

多くのものを屠り、葬る、

霊柩車だ

*

*

lost and found

駅に掲げられた看板の文字

喪失と発見がどこかにあるらしい

それも一そろいで

ぼくはそれに向かって歩き始めるが

いつこうに眼には入ってこない

遺失物も拾得物もなにもないというのに

ぼくは十二月の黒い犬になっちゃった

そしてだれか巨きな男がぼくをつまんで

発見に左手を

喪失に右手を

くくりつけていった！

*

病院で出会ったひとびとを懐いだす。

病めるものたちのなかで——跋

この詩集に収めた詩篇は25歳の秋、慈善病院と羽曳野の精神病院で書いたものだ。こののはじまりはひどい不眠症と、ブコウスキーの詩集「モノマネ鳥よ、おれの幸運を願え」。ある夜、突然詩集が理解できた！——とおもったわたしは新聞広告を引用し、「広告」という詩を書いた。その方法はけっきょく一回限りのもので終わった。しかし文体は生きつづけ、わたしは病院からでられない、外出すら赦されないなかで夜も昼もずっと眠らずに書きつづけた。気分は高揚し、あるいは極端に沈み、笑ったり、涙を流したり、いわば躁鬱状態で書きあげたものだ。社会医療センター付属病院の精神科医から、かれの病院である丹比荘病院に移され、そこを院内飲酒で追放され、さらに実家に帰されたときのを含めてこの一冊は成り立っている。じぶんの居場所を病院に求めながら、病院の規則から逃れながら、これらの詩篇は書かれたわけだ。みずからの毒、怨み、そねみを中心にしてわたしはこれらの詩を書いた。当初、長ったらしい、コピー調の題名が付されていたが、投稿と印刷に伴い、ほとんど二文字に集約した。たとえば『吉報』は「いますぐに黙らなければおれはまたひとつ至上の現代詩を完熟させおまえらのあほうづらを言の葉のうちにし雨季の寂滅でみじめたらしく濡らしてやるぞ！」という題だった。入院中、ヤマダという身体障害のあるひとが居候を勧めてくれたり、もとヤクザの老人が「ソープ奢ってやるよ！」といってくれたこともあった。婦長もよくしてくれていた。

丹比荘病院での詩篇は当時、手製本の一冊にまとめられ、当時の知人三人に送った。表紙は、帽子とジャケット、そして葉巻を加えた証明写真に顔彩で着色し、背表紙をジダンの箱をちぎって糊づけしたものにした。できるならもういちど見たいとおもう。——丹比荘病院に入ってから、病的な高揚はなくなり、わたしは落ちてしまった。病棟の冷たさが沁みるなか、トットリという女の子と仲良くなり、またナガオという老人にはお使いの報酬に金を貰ったり、そして強制退院になったときも、水彩画を当てに二千円、「きみに投資する、話もおもしろかったし」といってもらった。この詩集が精神的に苦しめられるものの癒やしにでもなればいいとおもっている。

わたしはいまなんとか日々をやりくりするのが精一杯だが、それでも心理面の問題は、心理学を識ることによっていくら

かましになつていとおもう。さあ、扉をあけて自身を分析すること、笑うこと、癒やすこと、そして愉しむことを始めてほしい。じゃあ、このくらいにしておこう。

'18年8月15日 なかたみつほ

広告——そのほかの詩篇 2009/11.02-12.17

発行日 2023 年8 月1 日改訂初版

著作・編輯・装丁デザイン・発行＝中田満帆

発行所＝ a missing person's press

住所＝〒651-0092 兵庫県神戸市中央区生田町1-1-13

新神戸マンション北館303 号